

今そこにあるオープンアクセス Clear and present Open Access

## 第 9 回 さらばベルリン Goodbye to Berlin

オープンアクセス(OA)のステークホルダー(利害関係者)と言え、まず研究者、そして学会・学術出版社員、図書館員、研究助成団体関係者、さらには納税者たる一般市民などが思い浮かぶが、実はもっと直接的な利害関係を持つ人々がいる。それは出版社に出資(あるいは出資を検討)している投資家、そして証券アナリストである。出版社の株価が自分たちの利益・損失に直結するので、ある意味、大多数の研究者や図書館員よりはるかに真剣に OA の動向に注目していると言ってもいいかもしれない。

9 月下旬、[バーンスタイン・リサーチ](#)という調査会社のクラウドディオ・アスペシ(Claudio Aspesi)というアナリストがエルゼビア社に関する投資レポートを発表し、これをおなじみの[リチャード・ポインダー](#)が公開している([STI Updates](#)では[タイムズ・ハイアー・エデュケーション\(THE\)](#)の記事として紹介しているが、THE 記事もソースはポインダー)。そのタイトルが「[リード・エルゼビア：さらばベルリン—薄れゆくオープンアクセスの脅威](#)」である。

アスペシは 2011 年、エルゼビア社のジャーナル・ビジネスは大学図書館予算の削減を受けて成長が鈍るとして、同社の格付けを下げた。さらに 2012 年、欧米で OA 化に向けた政策が打ち出され、全面的なゴールド OA への移行が現実味を帯びてくると、これがやはり同社の収益に悪影響を及ぼすと予測した。この時期、エルゼビア社はボイコット運動にあって[研究著作法案\(RWA\)](#)等への支持表明を撤回する(いわゆる学界の春)など、会社としてのイメージもあまり良くなかった。2012 年 3 月、アスペシはポインダーの[インタビュー](#)を受け、エルゼビア社が RWA を支持したのは間違いだったという趣旨の発言をしている。

しかしながら、今回のレポートは、タイトルが示すように、既存の大手出版社に OA が脅威となる事態は遠のいたというものである。ベルリンとは 2003 年に発せられた「[ベルリン宣言](#)」のことで、前年の [BOAI](#) などと共に OA 運動の高まりを象徴する文書である。それから 11 年が経過した現在、相変わらず予約購読モデルは健在であるとして、エルゼビア社の格付けを元に戻している。いわばベルリン宣言への訣別の辞である。

その理由の一つとして挙げられているのが、北米の大学図書館予算の改善である。2012-13 年度では 6 割以上の大学で増額となっている。懸念されたビッグディールの大量キャンセルは起こらなかった。図書館員は予算さえあればビッグディールを更新し続ける、というのがアスペシの出した結論である。

欧米の OA 政策については、ハイブリッドモデルやエンバーゴの設定が許容されているので、図書館が雑誌キャンセルに向かう可能性は低く、打撃にはならない。それどころか、論文加工料(APC)補助によってさらなる利益を得る可能性さえある。そもそも OA の目標(どういう問題を解決するのか)というのが人によって異なり、これでは何も達成できないだろう、といった指摘もあって OA 推進論者には耳が痛い。

もちろんエルゼビア社も完全に安泰というわけではない。アスペシが指摘するリスクは二つある。図書館全体の予算に対して資料購入費の伸びが大きく、再び予算削減となる恐れがあることと、ハイブリッドモデルでの APC と購読料の二重取り批判が高まる可能性があることである。

投資という観点からの冷徹な分析で非常に興味深かったのだが、英米のメーリングリストではほとんど反響がなかった([フランス](#)ではあった)。これも気になるところである。

